

(実践報告) 抄録用紙

演題名 (全角 80 字以内)	がん終末期における家族へのデス・エデュケーション ～輸液療法を通して家族ケアを考察する～
演者名	林 瞳、片山智栄、五味一英、袴田智伸、西田美幸、遠矢純一郎
所属	桜新町アーバンクリニック

目的

がん終末期において食事摂取量の低下に対して行う輸液療法は、必ずしも効果的な医療行為とはならず、返ってデメリットになってしまうことも多い。しかし、経口摂取ができなくなり徐々に衰弱していく患者を目の当たりにして、輸液療法を希望する家族は少なくない。我々は緩和ケアの視点からがん終末期の点滴は不要とこれまで認識していたが、在宅医療現場に従事し、輸液を行うことで穏やかな看取りを迎えた事例を経験した。  
がん終末期における輸液療法を通して家族へのデス・エデュケーションを考察する。

実践内容

対象：在宅死亡 1 ヶ月前から死亡日までの期間で、末梢点滴対象群、非対象群にがん終末期患者を分類  
方法：後ろ向き研究 (retrospective study)  
内容：家族へのデス・エデュケーションにおける在宅看護ケア

考察

終末期に近づくにつれ徐々に食事摂取量は低下する。それは病状が進行し死期を目前にした過程においては自然な経過ではあるが、やはり家族には受け入れがたい事実である。「どうかして少しでも栄養、水分を取らせたい」と願う家族の気持ちを尊重することが重要で、さらには患者が亡くなった後のグリーフケアにもつながると考える。  
死期に近づいていく患者に対し、家族だからこそできることを共に考え、実践していくことは、看取りの過程において重要な家族ケアとなる。  
患者の生命予後、病状をよく把握し、患者・家族と話し合いを多く持ったうえで行うがん終末期の輸液療法は、時に家族のデス・エデュケーションの過程を支える一端ともなりうる。